

私見創見 Thursday

2000年、私が学生だった頃、「大地の芸術祭 越後妻有(えちごまより)アートトリエンナーレ」(新潟県十日町市)が開催された。これまでのアートの概念が変わって拡散している。

た衝撃的な出来事だったのを今でも鮮明に覚えている。ここ20年ほどの間に日本でアートという言葉は、その意味を微妙に変化させながら社会的な認知度を高めている。ヒエンナーレ(2年に1度開

催)やトリエンナーレ(3年に1度開催)と銘打ったイベントが各地で開催されるようになり、もはや誰も正確にその数を把握できないほどにまで拡散している。

難しい知識やうんちくなどは必要ない。誰もが気軽に楽しむことができ、市民が参加しながら地域を明るく活性化させる役割が期待され、閉鎖的な「美術」からより多くの人に開かれた「アート」へ。特に震災以後、人々の「絆」の価値が問い直され、地域の課題や、日常の生活とアートが持つ創造力が Ausgangspunkt として新しい出来事をつくりだす。

美術館の中で額装された絵画、展示台の上でスポットを浴びる彫刻のよきな、アーティストがつくった「純然たるアート」だけがアートとは限らない。「モノをつくる」「アイデアを生み出す」「コミ

持続していく力を育む

是川縄文アートプロジェクト

ユニケーションをデザインする」といった試みで、街の中に広げていくプロジェクトが、近年「地域アート」と呼ばれるものである。アーティストとして、私も関わらせていただいた「是川縄文アートプロジェクト」(八



佐貫 巧

八戸学院大 短期大学部 准教授

さぬき・たくみ 1982年、静岡市生まれ。多摩美大卒、東京芸大大学院修了。2013年から現職。14年より八戸圏域で現代芸術教室「アートイズ」を主宰し、アートを通して少しでも生きやすい世の中をつくる活動をしている。おいらせ町在住。

戸市是川地区)は、是川団地の活性化を目的とした「是川地域」の底力「実践プロジェクト会議」で20年に発案され、「むつ小川原地域・産業振興財団」のプロジェクト支援助成事業と地域の方々の寄付に

は、近年「地域アート」と呼ばれるものである。アーティストとして、私も関わらせていただいた「是川縄文アートプロジェクト」(八戸市是川地区)は、是川団地の活性化を目的とした「是川地域」の底力「実践プロジェクト会議」で20年に発案され、「むつ小川原地域・産業振興財団」のプロジェクト支援助成事業と地域の方々の寄付に

是川団地は1972年(昭和47年)に整備された住宅地で、78年(同53年)に人口5537人とピークを迎えた後は減少し、2018年には2714人と約半分だ。65歳以上の割合も46%と、八戸市内でも高齢化率が極めて高い地域である。

20年は、是川団地中央公園内にある経年劣化した全長37mのコンクリート壁を再生するための壁画制作を行った。壁画は市民から公募により原画を集め、是川縄文館の専門的監修のもと図案化、八戸学院大学短期大学の学生や地域の子どもたちと制作した。壁画の公募に当たっては、是川縄文遺跡固有の意匠を踏

まして原画を作成することを条件とし、是川縄文遺跡および発掘物へ理解を深めるきっかけとなった。

21年には「北海道・北東北の縄文遺跡群」のユネスコ世界遺産登録が決定。同年のアートプロジェクトでは、前年度に制作した壁画と是川縄文館をつなぎ、是川地区の様々な箇所を周遊する「是川縄文トレイル」を実施した。

是川縄文アートプロジェクトの取り組みには、アーティストが介在しているもの、実質的にはアーティストによる作品を見るのではなく、市民や学生が深く関わった作品、地域の史跡や郷土資料、そして街並みと自然の鑑賞・体験に主眼を置いた。

この場合の「アート(壁画)」の役割は、これまであまり言みられないことになった。是川地区の景観への「気づき」をもたらす仕組みとなっている。そして、アートプロジェクトを通じて、貴重な地域資源である是川縄文遺跡を「再照射」したことに、停滞ムードが漂う団地を活気づけ、住民に未来への希望を与えることにつながった。

加藤雄男氏(クリエイティブ・ディレクター)の言葉を引用すると、「地域芸術祭ではアーティストの作品制作において住民が欠かせないパートナーとなって」いることにも、「必ずしも専門的な表現手段を持たなくても」アートプロジェクトに市民が参画することができ、こうした活動は、地域社会の創造性を育み、生き方や社会の在り方について、新しい見方を示してくれる。それは、地域社会が持続していく力となるだろう。